

【表題】職務適性検査を用いた選抜方式の有効性について【論文】

【著者】山内 慎介

【発表】航空大学校研究報告 R-59

【時期】2006年12月

【概要】

航空大学校入学者選抜試験は、筆記による第一次試験、第一種航空身体検査基準に準じた第二次試験、および飛行適性検査と面接による第三次試験で構成されている。

このうち、身体条件により合否が決定する第二次試験を除くと、航空大学校が主体的に選抜基準を設定できるのは

- ・筆記による第一次試験
- ・飛行適性検査
- ・面接

の三つとなるが、

- ・第二次試験(身体検査)受け入れ数の制限
- ・第二次(身体検査)合格率の低さ
- ・最終合格者判定は第三次試験成績および第一次試験成績の両者で実施

により、現行の入試方式では筆記による第一次試験結果(成績)が最終合格者決定に最も大きく寄与していると考えられる。

従って、第一次試験の段階で Pilot としての適性が高いと思われる者(入学後の教育訓練により順調に伸びると予測される者)をいかに選抜するかが入学者選抜試験の精度向上の鍵となるといえる。

航空大学校では過去に訓練生の操縦成績に関する調査がなされており、操縦成績に影響する要素を調査・分析している。しかしながら選抜(入試)段階でこれを判定する具体的調査はなされていない。

そこで本研究では、近年多くの職種に用いられている「職務適性検査」により更に有効な選抜の可能性について調べた。